

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 29 日現在

機関番号：17701

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24652059

研究課題名(和文) アメリカン・ルネッサンス作家における口述文化の影響とその要因の分析

研究課題名(英文) Reconsidering Oral Tradition and Its Impact on American Renaissance Writers

研究代表者

竹内 勝徳 (Takeuchi, Katsunori)

鹿児島大学・法文学部・教授

研究者番号：40253918

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：日本英文学会第84回全国大会シンポジウム「旅と移動のアメリカ文学」で発表した「(脱)トラベル・ライティングとしてのTypee」ではアメリカの口述文化であるトールテールの対話構造がTypeeの語りの基盤を構成していることを明らかにした。また、Facing Melville, Facing Italyに掲載された"Vocal Sounds and Linguistic Signification in Herman Melville's Novels"では、メルヴィルの口述文化に対するこだわりと、ホーソーンのものに対する警戒が鋭く対立する点を指摘した。

研究成果の概要(英文)：In "Deconstructing Travel Writing: Oral Tradition in Typee," I elucidated how Melville reconfigured narrative structures of Typee based on tall tale tradition. Especially, its dialogic pattern shows exhilaration, referential illusion, vocal sound expression, etc. In "Vocal Sounds and Linguistic Signification in Herman Melville's Novels," I described the course of changes in Melville's view of language and vocal sounds which was influenced by Nathaniel Hawthorne and, probably, through him, by Charles Kraitsir's Natural Language theory.

研究分野：アメリカン・ルネッサンス

キーワード：アメリカ文学 アメリカン・ルネッサンス

### 1. 研究開始当初の背景

トールテールと文学の関係を論じた批評書としては、ヘンリー・ウォナムの『マーク・トゥエインとトールテールの技法』(1993)、キャロライン・ブラウンの『アメリカ文学とフォークロアにおけるトールテール』(1987)、ジョン・ブライアントの『メルヴィルと平静』(1993)などがある。この研究史において指摘できることは、(1)トールテールとアメリカン・ルネッサンスの関係を論じた研究がない。(2)どのトールテール論も基本的にユーモア論に帰結しており、文体の分析作業において、多様な要素を抽出するための言語学的手法が不足している(3)トールテールの政治性に踏み込んだ考察が不足している。本研究は、これらの問題点を踏まえ、19世紀前半のアメリカ口述文化を分析・比較することで、アメリカン・ルネッサンス作家の文体の特徴を明確にするものである。

### 2. 研究の目的

研究は、トールテールに代表されるアメリカの口述文化が内包するメッセージ伝達構造を、最新の科学的知見によって検証すると共に、それがアメリカン・ルネッサンス作家の作品にどのような形で反映し、テキスト構造にどのような変化を与えたのかを明らかにするものである。アメリカン・ルネッサンスの作家は、トールテールや説教、演説など同時代に流行したオーラル・メッセージングに強い影響を受けている。本研究は、そうした声の文化にみられる言語的特質を分析し、それをアメリカン・ルネッサンス作家のテキストに読み取り、それが作家の想像力によってどう用いられ、どのように変化したかを調査する。

### 3. 研究の方法

19世紀前半のトールテール、説教、演説等の口述性について分析したうえで、それによって抽出したテキストの特質をメルヴィルやホーソーン作品における語りの特徴と比較し、その言語的特質を明確化した。また、それまでに得た調査結果を基に、ホーソンやメルヴィルの口述文化的なテキストが、同時代のトラベル・ライティングや様々な調査文書、法制度やモラル、社会秩序との関係でどのように位置づけられるのかを明らかにした。

### 4. 研究成果

日本英文学会第84回全国大会シンポジウム「旅と移動のアメリカ文学」で発表した「(脱)トラヴェル・ライティングとしてのTypee」ではアメリカの口述文化であるトールテールの対話構造が『タイピー』の語りの基盤を構成していることを明らかにした。例えば、口述的な対話性によって、語り手と読者の間に臨場感が生まれる。このことは『タイピー』における音声表現に着目することで、さらに明確になる。それによって口述的語り手トンモと口述社会であるタイピー族との特殊な関わりも見えてくる。あるとき、トン

モはタイピー集落で竹鉄砲を作ることを思いたち、それを住民に提供し、戦争ごっこを始める。トンモは読者に“you”と呼びかけ、直接語りかけることで、対話構造を創出している。同時に“Pop, Pop, Pop, Pop”というオノマトペを使い、過去のシーンを語りながらも、この発射音を語り手と読者の間でリアルタイムに響かせることにより、あたかもそのときの活動が目の前で繰り広げられているかのようなムードを作り出している。その中で、読者は現地を歩き、待ち伏せに会い、標的となり、攻撃される。読者がタイピー集落の中に再配置されることになる。音声とは消失する瞬間に存在するものであり、それを共有することは、身体を軸として、話者と聴取者の生活の全体性を呼び込むことでもある。これは、ウォルター・オングがとりまとめた議論であるが、このシーンを口述的に受け止めるならば、オノマトペや読者への語りかけによって、語り手と読者が、ホーソン家で身振りを交えてマーケサスでの体験を語ったメルヴィルのように、身体ごと過去のシーンを再演するムードに包まれることになる。

*Facing Melville, Facing Italy* に掲載された "Vocal Sounds and Linguistic Signification in Herman Melville's Novels" では、メルヴィルの口述文化に対するこだわりと、ホーソーンのそれに対する警戒が鋭く対立する点を指摘した。上述のように口述の世界に自由に参入するメルヴィルは、『タイピー』以降の作品でも、音声による人と人の結びつき、さらに言えば、鼓膜の振動を介した身体と身体の結びつきを重視する傾向を示した。それは『レッドバーン』『白鯨』などでも繰り返し表現されてきた。しかし、1850年に入りホーソンとの交流が始まると、こうした音声による結びつきや音楽的な表現に否定的な描写が含まれるようになる。それが『ピエール』におけるイザベルの姿であり、『ピリー・バッド』におけるどもりの結果としての暴力である。メルヴィルは音声や身体による結びつきに信を置きながらも、ホーソンや当時の言語学からの影響により以前のようにそれを楽観的に受け入れることができなくなったと思われる。しかし、逆に、それゆえの人間関係の矛盾と悲劇を描けるようになったのである。

日本ナサニエル・ホーソン協会九州支部シンポジウムで発表した「『ファンショール』における鏡像と破壊 ポール・オースターを通して読むポストモダンなホーソン」では、ポストモダニズムの観点からホーソンの『ファンショール』を分析し、鏡像の分身に同一化しようとする登場人物が、実は音声と意味の恣意的な結びつきを拒む想像界的状況に停滞しているということを明らかにした。ナサニエル・ホーソンはこうしたテキストと声の関係にみられるポストモダン性を意図的に追及したわけではないが、“Vocal

Sounds and Linguistic Signification in Herman Melville's Novels"での指摘と同様、声の文化や口述文化に対して一定の距離を置こうとしていたと言える。ナサニエル・ホーソーンは 1828 年に最初の作品『ファンシヨー』を匿名により出版した。しかし、せっかく世に出たこの本をその後ほとんど回収して焼却処分している。このエピソードはアメリカ文学の研究者にはよく知られているが、『ファンシヨー』そのものはあまり研究の対象にはなっていない。この作品に目を付け、それをポストモダンの時代に甦らせたのは、アメリカを代表する現代作家ポール・オースターであった。彼の最初期の作品『閉ざされた部屋』にはファンシヨーなる不可解な人物が登場する。何人かの批評家はホーソーンのファンシヨーは作者の自画像であると述べているが、『閉ざされた部屋』に登場するファンシヨーも物語中で語り手の分身のような役割を担っている。自分の名前を伏せて自画像を描くことで、主体の鏡像が一人歩きする。しかし、鏡像に耐えられずに主体がそれを破壊してしまう。それは主体の自己破壊の願望とも言えるだろう。『閉ざされた部屋』の語り手はファンシヨーの妻と結婚し、ファンシヨーの伝記を執筆し、ファンシヨーの母と性的関係を結ぶ。これは主体（語り手）がファンシヨーという似姿に自分を重ねた結果、あこがれながらもそれが邪魔になったため、似姿を借りて近親相姦を行うことでその出所を破壊したということである。オースターはホーソーンの無名の作品を鏡像と破壊による創造行為として応答＝再演し、19 世紀から現代に結びつくアメリカ文学史の潮流を発見してみせたと言える。それを考えるとき、ホーソーンは音声と意味が自由に結びつくポストモダンの前言語的・社会的状態に宿る危険性を直観的に見ぬいたうえで、自らそれを描いた作品を抹消したのかも知れない。

「革命を呼び込む移民の行方—チャールズ・クライツァーの言語理論と『緋文字』」では、やはり、ホーソーンの口述文化に対する距離感が、ディムズデルの胸に現れたとされる「A」の文字、即ち、書き言葉が肉体化するシーンに読み取れることを論じた。1849 年、ナサニエル・ホーソーンが『緋文字』を構想していた頃、義理の姉であるエリザベス・ピーボディは言語学に傾倒し、その知見を『美学論集』にまとめた。このきっかけとなったのは、ハンガリー出身でポーランド革命に身を投じたチャールズ・クライツァーという言語学者であった。クライツァーは 1833 年にアメリカに亡命し、1844 年にボストンに移住している。エリザベスはクライツァーの言語理論に魅了され、その講演を書き取った原稿を基に、『アルファベットの意義』というパンフレットを作成、クライツァーの著書として出版している。この書物はヘンリー・デイヴィッド・ソローに大きな影響を与えた。

『緋文字』の出版に至る数年間、ボストンではちょっとした言語学ブームが起こっていたと言っている。本論では『美学論集』や『アルファベットの意義』で用いられたキーワード「自然言語」を取り上げ、ホーソーンが自然言語を人間の野性性の表れとして認識していたとする前提に立ち、『緋文字』を人間の罪を言語的に探求した作品として捉えた。併せて、従来から、この作品には、1848 年のフランス革命に対するホーソーンの批判が込められていると考えられてきたが、本論では自然言語がハンガリー出身の移民によってもたらされたことを重視し、作品における言語の特質と革命のイメージの関りを分析し、全体として、この作品が人間の野性性、罪、社会の変革をどのような構図で組み立て、表現したのかを明らかにした。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 5 件)

竹内勝徳「(脱)トラヴェル・ライティングとしての Typee」日本英文学会第 84 回全国大会シンポジウム「旅と移動のアメリカ文学」2012 年 5 月 専修大学生田キャンパス(神奈川県川崎市)

竹内勝徳「独立戦争とメルヴィル」日本アメリカ文学会第 51 回全国大会シンポジウム「メルヴィルと戦争」2012 年 10 月 名古屋大学東山キャンパス(愛知県名古屋市)

竹内勝徳「アフェクト研究からみたアメリカン・ルネサンス—ハーマン・メルヴィルを中心に」九州アメリカ文学会第 59 回大会 2013 年 5 月 長崎県立シーボルト大学(長崎県西彼杵郡長与町)

竹内勝徳「アメリカン・ルネサンスにおける身体と機械—アフォダニクス表象を中心に」日本英文学会九州支部大会 2014 年 10 月 福岡女子大学(福岡県福岡市)

竹内勝徳「『ファンシヨー』における鏡像と破壊—ポール・オースターを通して読むポストモダンなホーソーン」日本ナサニエル・ホーソーン協会九州支部シンポジウム

「再演—応答行為としての文学史—アダプテーションの中のホーソーン」

2015 年 3 月福岡大学(福岡県福岡市)

〔図書〕(計 3 件)

竹内勝徳「革命を呼び込む移民の行方—チャールズ・クライツァーの言語理論と『緋文字』」『ロマンスの迷宮』英宝 pp.5-23 (2013)

竹内勝徳・高橋勤『環大西洋の想像力—越境するアメリカン・ルネサンス文学』彩流社 (2013)

Katsunori Takeuchi "Vocal Sounds and Linguistic Signification in Herman Melville's Novels" *Facing Melville*,

*Facing Italy* (Sapienza Università  
Editrice) pp.25-40 (2014)

〔産業財産権〕  
出願状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等  
なし

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

竹内勝徳 ( Takeuchi, Katsunori )  
鹿児島大学法文学部教授

研究者番号：40253918

##### (2) 研究分担者

なし ( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

なし ( )

研究者番号：